

12. マンデルフレミングモデル

マクロ経済で習うこと

中心はGDP

(支出の内訳)

$$GDP = \text{消費} + \text{住宅投資} + \text{設備投資} + \text{在庫投資} + \text{公共投資} + \text{政府支出} + \text{輸出} - \text{輸入}$$

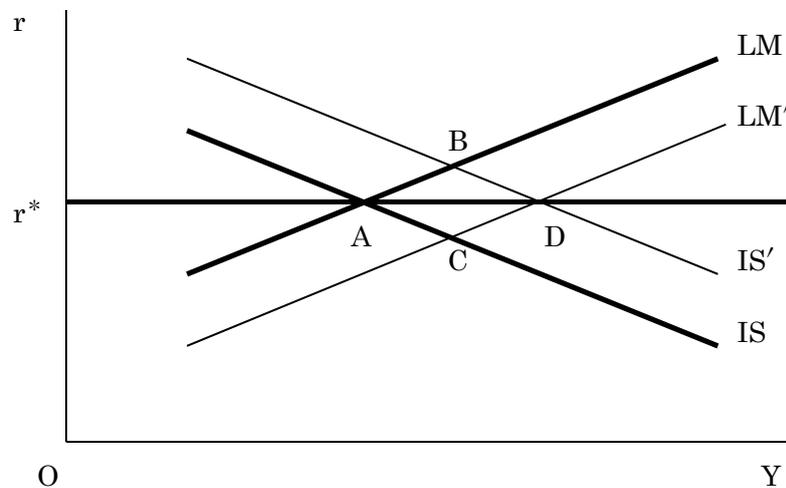
(時系列)

$$GDP = \text{経済成長} + \text{景気循環}$$

| 市場 | 生産物市場 | 貨幣市場 | 労働市場 |
|----|-----------------------|----------------|---------------|
| 供給 | 企業 | マネーサプライ | 労働者 (失業率) |
| 需要 | 消費・投資 | 貨幣需要 | 企業 |
| 価格 | 物価 (消費者物価 卸売物価) | 利子率 (国債利回り) | 賃金 (雇用者所得) |

マンデル・フレミングモデル

マンデル・フレミングモデルは、貿易を含めて財政政策や金融政策の効果を調べるものである。ここでは資本移動が自由な場合を考える。



① IS-LM曲線に、海外の利子率 r^* の直線を加える。

② 需要に輸出入を加える。

$$Y = C + I + G + \underline{E - M}$$

E : 財・サービスの輸出 M : 財・サービスの輸入 E - M : 経常収支

円高→経常収支減、円安→経常収支増

(説明) 1ドル=100円→1ドル=200円になると、たとえば米国で同じ1ドルで売っても円安の方が儲かる。→輸出が増え、輸入が減る。

③ 公共投資増加や通貨供給量増加の効果が変わる

公共投資の増加 IS → IS'

通貨供給量の増加 LM → LM'

・公共投資増加の場合

ISからIS'になると均衡点はまず、Bになる。

この点では、国内利子率 > 海外利子率となる。

為替相場の制度によって影響が異なる。

① **変動相場制** 国内の利子率 > 海外の利子率 → 円高（「通貨の増価」ともいう）

輸出が減少し、輸入が増加して国内への需要は減少する。→ **IS曲線が左にシフト**

輸出－輸入＝貿易収支（経常収支）は、円高で減る。

② **固定相場制** 海外からの資本の流入→資本収支の黒字→貨幣供給量の増加

→**LM曲線が右にシフト**

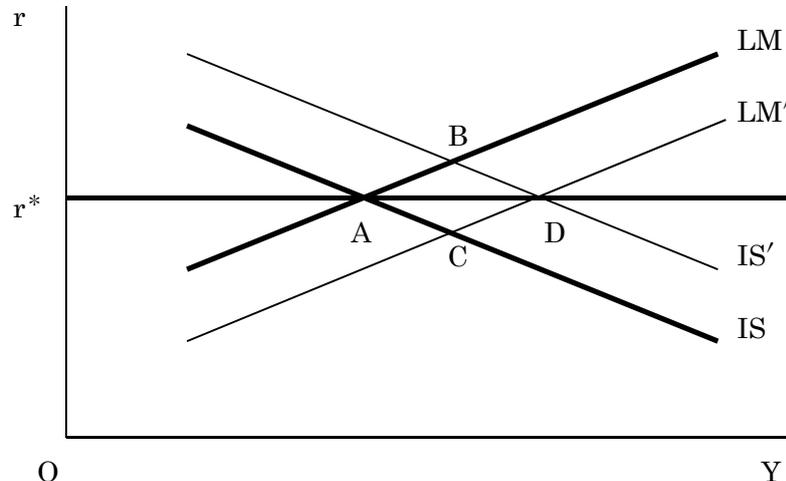
・通貨供給量の増加

LM→LM'となり、均衡点はD点となる。

この点では国内利子率 < 海外利子率となる。

① **変動相場制** → **IS曲線が右にシフト**

② **固定相場制** → **LM曲線が左にシフト**



財政政策の効果

変動相場制 A点からB点へ移動し（公共投資の拡大）、A点へ戻る（円高）

固定相場制 A点からB点へ移動し（公共投資の拡大）、D点で均衡（資本流入）

金融政策の効果

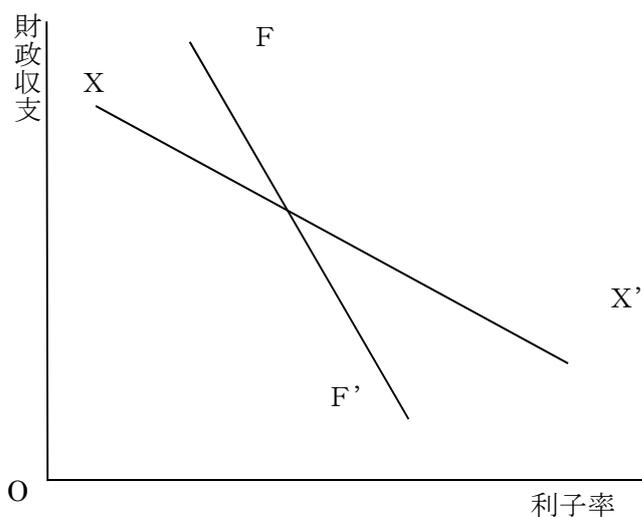
変動相場制 A点からC点へ移動し（マネーサプライ増）、D点で均衡（円安）

固定相場制 A点からC点へ移動し（マネーサプライ増）、A点へ戻る（資本流出）

マンデルフレミングモデルのポリシーミックス

固定相場制の元で

国内の完全雇用達成のためには財政政策を使い、
国際収支の改善のためには金融政策を使うというもの



XX'は国内均衡（完全雇用の状態）

金利の上昇→投資減少→公共投資の増加→財政赤字の拡大：右下がり

FF'は海外均衡（国際収支が均衡している状態）

金利の上昇→資金の流入→国際収支の黒字化→公共投資の増加→財政赤字の拡大：右下がり